入選

枯らす女と育てる母

久家　祥子　　福岡県福岡市　　三十三歳

緑がある生活がしたい。

子どもの頃、ゴッドハンドの母が花やら植物やらを上手に育てているのをよく見かけた。だが、私にはそのゴッドは受け継がれなかった。一人暮らしを始めて、意気込みはあれど、私のバッドハンドにかかると植物たちはことごとく枯れた。皆で示し合わせたかのように仲良く枯れた。

育て上手な母にレクチャーを乞えば早いのだが、それには抵抗があった。母とは大人になって意見の食い違いから少しずつ距離ができ、気付けば疎遠になっていた。だから余計な会話はしたくなかった。

懲りずに挑戦と失敗を繰り返す私だったが、唯一成功したモノがある。それは『豆苗』だ。失敗のしようのない程簡単な再生野菜なのだが、すくすく育つ姿はまるで子どものようで愛らしかった。ようやくの成功に私は歓喜した。が、同時にモヤモヤしたものが心に渦巻いた。

今まで枯らしてしまった緑たち、ごめんね。ちゃんとその子たちに向き合って、それぞれに合った育て方をしてあげたらよかった。後悔の念とともに、その時なぜか両親の顔が心に浮かんだ。

私は意を決し、収穫した豆苗を持って実家に久しぶりに帰ることにした。

「ただいま。これ、自分で育てたんだけどさ、私が料理するから一緒にお昼ごはん食べない？」

ぶっきらぼうに言う私に、母は意外にも嬉しそうに頷いた。

「それと、色々ごめんね。よかったら植物ってどうしたら上手に育てられるか教えてよ」